地の星

―父の生まれた田園に立ち 父の血の騒ぎを聴く 茫然と星をあおぐ―

1992年 新潮社

「Story

松坂熊吾は、大阪での事業をたたみ、病弱な妻子のため郷里の愛媛県南宇和へと住まいを移す。大自然の中ですくすくと育つ息子 伸仁を見守りながら、持ち前の行動力と周囲の人々からの信頼を武器にさまざまな難題を乗り越えていくが、幼なじみと名乗る一人の男の出現が、松坂家に陰を落とす。ふるさとでの暮らしがもたらす虚無と、安全に生きようとする志向に疑問を持ち始めた熊吾は、新たな決意を固める。」

『流転の海』シリーズ

『流転の海』シリーズは、宮本氏のライフワークとなる長編連作である。宮本氏の父、母、そして自分自身をモデルとしているといわれ、物語は主人公の熊吾に関わる個性的な人達を中心に、終戦直後の混乱の中、必死にもがき生きてきた人々の生きざまを描く。舞台は、時代が進むにつれ、故郷の愛媛、新天地を目指して移住した富山、そして再び大阪へと変遷すると同時に、父を中心に描かれる世界から、息子の目を通した物語へとなってゆく。

『流転の海』（流転の海 第一部）福武書店1984年7月・新潮社1992年11月
『地の星』（流転の海 第二部）新潮社1992年11月／『血脈の火』（流転の海 第三部）新潮社1996年9月
『天の夜曲』（流転の海 第四部）新潮社2002年6月／『花の回廊』（流転の海 第五部）新潮社2007年7月
『慈雨の音』（流転の海 第六部）新潮社2011年8月／『満月の道』（流転の海 第七部）新潮社2014年4月
現在、「新潮」（新潮社）にて、第八部である『長流の畔』が連載中。（2014年10月現在）

熊吾の圧倒的な存在感

機転の良さと抜群の行動力で、親族はもちろん近所の住人や裏切者にまで頼られてしまう熊吾。次から次へと訪れる試練を勢いよく解決していく姿は読んでいて爽快です。父、または夫としてあるべき姿に悩んだり、嫉妬したり、感傷に浸ったりと人間味溢れる熊吾の今後に興味を惹かれます。

Review